

みつざんまい
蜜三昧 2

渚 まこと

蜜 三 昧 (2)

琥珀彩の知恵 (2)

>

「そうよ。萬田律子はインセストで繋がる鬼畜父・萬田剛志の若い後妻と、複数の情婦を陰から操ってるわ。私の真の金脈は、事実上、超富豪・萬田家の覇権を萬田剛志から継承した萬田律子よ。長年リンクしてきた萬田律子は肉親でも殺せ

る類い希な毒婦。秘密だけど、

私は彼女の不遜な奸計に関わってるわ」

「そんな驚愕の事実、初めて知ったわ。関わってる不遜な奸計って？」

「口外無用だけど、美香には話すわ。近い将来、美香も間接的に関わることにな

るのだから……」

「エッ、私も関わるの？」

「大富豪・萬田家の覇権をインセストでリンクした嫡女・萬田律子に継承させた萬田剛志……元・経済界重臣の引退以後の生きがいは、春画収集と性常理を嘲る猥雑なセックスよ。濡場ではクスリでポテンツを蘇らせる老熟色情狂の死の美学は俗にいう破廉恥な腹上死。彼自身が想定する自らの死に様は、白昼夢もどきの

苛淫痴癡な交尾の最中に見舞わ

れる不慮の死。萬田律子の冷酷な先読みでは心肺系、循環器系に日常生活に支障を来さない程度の疾患を持つ萬田剛志の死の時期

は、心肺機能に負荷の大きい薬物常用を続けても二年余先になる。無論、死に場所は、憑かれたように猥雑な交尾に耽溺する閨房。萬田律子に教唆されて彼女の鬼畜父・老熟色情狂を苛淫な交尾中の偶発の心筋梗塞、もしくは脳梗塞に偽装して姦殺する女は私・並木悦子。二年余先という時間の内に、萬田律子は萬田家と萬田剛志個人の隠匿資産を彼女個人の隠匿資産に変え、邪魔な存在になる父の姦殺を密に気脈を通じる私にやらせる……」

「大富豪・萬田家の陰の女君は怖ろしい女ね。悦子はパトロンである萬田律子から課税されない桁違いの報酬を得て、彼女の寵愛と人脈の恩恵に預かり、富裕族の仲間入りを果たすことになるのね」

ら課税されない桁違いの報酬を

「萬田剛志の生殺与奪権を握る陰の女帝・萬田律子の寵妾を自負する私が欲しいもののは実利よ。隠匿資金が増え

ても、美香と同じ少しリッチな小市民のライフ・スタイルを崩したくないわ。無限の財産……執愛の伴侶・藍染美香と切れるつもり

のは実利よ。隠匿資金が増え

は毛頭無い。執愛関係故えの痴話喧嘩、嫉妬からみの他愛ない諍い、性快樂を貪る耽美な鬨ぎ合いは、因縁めいた執愛関係を測る尺度よ。決して、愛のうつろい

はない……」

「私が悦子以外の女、もしくは男と本気でリンクしても？」
「ウッフッフ、本気もどきで儂く終わる火遊び性愛止まりだと分かるから、二人の執愛関係は微塵も陰らない。逆に嫉妬はコイタスをより美味しくする極上のスパイスになる。私を裏切れば、人質同然の美香の分身……私を祖母と信じた魅希と奈魅の命を頂くわ」

「怖い奸婦っ。逆のシチュエーションもあるわね」
「あり得ないけど、私が美香以外の女、もしくは男を本気で愛したら、美香はどうする？」

「悦子は藍染美香という劇薬にもなるハード・ドラッグを絶てない真性のジャンキーなのよ。直ぐ艶褪せする不倫愛にうつつを抜かす阿呆ではない。三日間、私が狂って気が変になるはず。私は園逆だから、お互い様……」

と肌を合わさなかったら体調

面妖な言葉のじゃれ合いを止め、実利に直結する話題に変えた。

「話しを萬田剛志のことに戻すけど、二年余後に萬田律子に教唆された悦子が犯す殺人……老熟色情狂を腹上死に迫いやる悦子の犯罪は、苛淫な交尾中の不慮の死に偽装できるの？悦子は過失致死の罪に問われないの？」

「大丈夫、萬田剛志と私の濡場になる萬田家別邸の特別の寝室は、密室同然のソゼロ。私との常軌を逸した苛淫な交尾中に、俗にい

ドムよ。その濡場の目撃者は

う腹上死を遂げた老熟色情狂の死因は、淫らな刺客が仕掛ける急性心筋梗塞、もは不可能。凶器は私自身の女軀。物証はゼロ。世間にはスキャンダラスな真相を闇に葬る類例が少なくないわ」

しくは脳梗塞。私の殺意の立証

「でも、悦子は萬田剛志の唯一の被疑者にされる」
「端と刑事の事情聴取は受けるけど、過失致死の罪を認める私の自白はない。萬田律子の殺人教唆も立証不可能。萬田剛志の絶息を確認した私のかたちだけの緊彼の主治医……萬田律子と密かにリンクした医師

急救命処置、事後の緊急通報、

への緊急連絡も手抜かりはない。黒に近い被疑者にされても、疑惑だけでは過失致死の罪は問えない。府警本部に裏人脈を持つ父から受け継いだ萬田律子はそのコネを使い、萬田剛志のスキャンダラスな死の真相を闇に葬り去るわ。死人に口無し。萬田一族の結束は頑強よ。萬田剛志の薬物入手経路と薬物使用、萬田家の継承者になる長女・萬田律子との近親相姦も他の隠蔽情報と共に隠蔽される」

コネを使い、萬田剛志のスキャンダラスな死の真相を闇に葬り去るわ。死人に口無し。萬田一族の結束は頑強よ。萬田剛志の薬物入手経路と薬物使用、萬田家の

「想像はつく……」
「美香の想像以上よ。萬田一族は名実共に萬田家覇権を完璧に掌中にした萬田律子の存在を認め、萬田剛志の死を一族の摂理ととらえて彼のスキャンダラスな死の真相が漏洩する危惧は露ほどもない。萬田家の新たな覇権構図は微動だにしない、と思う……」

美香は怪しい戦慄で逆毛立った。
「旧家・富豪・萬田家代々の当主は男性だったの？」
「萬田律子に見せられた系譜図では女当主はいないけど、当主とインセストでリンクして実質覇権を握った女君はいたかもしれない。萬田律子自身から寝物語で聞いたけど、彼女の初めての男は父・萬田剛志よ。父娘相関歴は彼女の十五歳の晩春からだ……」

はヘドニズムの極致よ、と悪魔

的な台詞を吐くわ。萬田家の正当な継承者の長男は過去形の存在だから、鬼畜父とインセストでリンクした長女の私が萬田家の覇

権を継承するのは当然、と魔妖に微笑で強弁するわ。旧家の刻印が付く富豪家には、性道義、性常理を嘲る近親相姦が隠蔽された類例が少ない……」

インセストでリンクした父をも毒牙にかける萬田律子の凄まじい覇権欲に逆毛立ち、クスリでポテンツを得る老熟色情狂・萬田剛志の禁断の性への飽くなき執着に戦慄した。

「まだ死に体にはならない萬田剛志の老熟性豪ぶりは驚きね。現在、悦子以外の幾人の女と交尾んでるの？」

「幾人になるかしら……淫乱女の別貌を持つ美女なら誰でもいい、という色情狂老人ではないわ。偏執する女……麗しき隠れ淫婦の近親女性と、自分の偏執嗜好に合う隠れ淫乱女だけ。日毎に交尾む性奴に等しい四十四歳年下の後妻・萬田真実。萬田剛志の付人兼秘書の美魔女奸婦・神野由貴、三十三歳。三十九歳の萬田家マルチ執事・小塚朱実……萬田剛志の内縁妻役を兼ねる才媛奸婦。養女のタト一を彫られた十六歳の美魔少女・萬田留美。そして、萬田家覇権を事実上継承した類い希な麗しき毒婦……長年、萬田剛志と近親相姦を続ける萬田律子……」

「凄まじい偏執ね。私が彼の情婦のタグをつければ七人になる。萬田剛志のペ*スを挿れる個々の女性は、陰の女帝・萬田律子とリンクして緻密に気脈を通じてるの？」

怪しい好奇心を募らせた。

「無論、秘かに、緻密にリンクしているわ。彼女達は萬田律子に生殺与奪権を握られている。事実上継承した萬田家の新たな覇権構図をつくる萬田律子の腹心の配下にならなければ、超がつく富豪・萬田家という背徳の園から弾き出されて甘生活を失う。萬田剛志の若い後妻・萬田真実も例外ではない」

「エッ、嘘でしょ。妻の座は法的にも護られているのに……」

「萬田律子が君臨する萬田家そのものが伏魔殿よ。厚いベールに包まれた伏魔殿の奥深くで何が起きても、すべて隠蔽されるわ。楽園から弾き出した萬田家の秘密を知る人間の口を封じる手立ての一つに、迷宮入りになる偽装失踪という恐怖く術は無きに等しい。怖い女君から寝物語で聞いたけど、本来の萬田家継承者だった長男・萬田武雄……萬田家の覇権を目論む萬

の図式があるわ。その疑惑を解

田律子にとって邪魔な存在になる彼女の兄は九年余りに忽然と姿を消して消息死亡とみなされているわ。彼の婚約者だった女は

を絶ち、すでに失踪宣告審判で

彼の失踪前から萬田剛志のペ*スを挿れていた雌で、陰の女君・萬田律子と密に

リンクしてきた神野由貴……」

「ぞっとするノン・フィクションね」
「伏魔殿・萬田家に棲む鬼畜女……長年インセストでリンクした鬼畜父からファミリーのヘッドの座を譲り受けた類い希な毒婦よ。彼女から得た他言無用のシークレッターに偽りはないわ。私に執心する萬田剛志は、長女・萬田律子の女であ私も、未亡人・藍染美香とサフィズムで繋がる異母姉というフィクションを鵜呑みにしている。彼とパトロン&情婦の関係を続ける私の異母妹……濡場で凄味のニンフォマニアの別貌を顕わにする藍染美香に萬田剛志が執心する、という萬田律子と私の読みに狂いはない」

「萬田剛志と悦子と私の初めての三つ巴の性宴には、そんな奸辣な意図が隠されてたのね。萬田剛志には加齢臭がなくて、雄の精気を感じる容姿にも生理的におぞましい老醜がなかったし、琥珀色の皮膚に加齢による弛みも無かった。クスリで強制勃起されたシンボルもサイズが頃合いで、老人特有のおぞましさが無かったわ」

過日、悦子を交えた萬田剛志との白昼夢もどきの三つ巴の性宴の記憶をを脳裏で部分的に再現した。クスリで強制勃起されたペ*スの凶淫なボリューム、薬物のエフェクトで二時間余は持続する悪魔的なポテンツ、ヘテロセクシュアルの美味しさを知る熟雌が悦び張り出たグランスの刺激的なかたち、老獪な交尾スキルの記憶を生々しく蘇らせた。

「近親女性の性に偏執する老熟色情狂……萬田律子が父娘相姦の申し子を胎んで搔爬した時にパイプ・カットした萬田剛志の近親女性への偏執性は執念と化したようね。萬田一族の事実上の頂点になった萬田律子から直に得た情報から、萬田剛志の近親性愛への凄まじい執念が分かる」

「生まれながらに背負った性業なのね」

「先付けの性業ではなく、彼の亡母・萬田絹絵に背負わされた後付けの性業よ」

「エッ、実母に背負わされた？」

「萬田剛志の初めての女は、麗しき鬼畜母・萬田絹絵よ。母子相姦は彼が十五歳の晩夏から、と聞いたわ。萬田絹絵……夫の謎の交通事故死後に萬田家を継承し男・萬田剛志との母子相姦は、萬田絹絵が疑惑の自死を遂げる十八年後の晩秋まで続いた。長女・萬田律子の父・萬田剛志のインセストは彼女が十四歳の早春からだから、母にセックスのイロハから馴致された萬田剛志は、母・萬田絹絵、長女・萬田律子の中にタフなシンボルを挿れてきた紛れもない鬼畜男よ」

女・萬田律子の中にタフなシンボル

驚愕した美香は強い衝撃を受けた。

『父・萬田剛志の暫定二年余の余命を掌の上で弄ぶ陰の女帝は、旧家・富豪・萬田家という妖怪に見込まれた鬼畜毒婦だわ。妙な胸騒ぎがする。私は彼女に狙われた獲物なのかしら？ 奸智にに長ける彼女と悦子の間では、すでに私を陰の女帝とリンクする萬田剛志の情婦にする奸計が立てられているのかもしれない』

萬田剛志の情婦、イコール、萬田律子の情婦という図式をイメージし、鼓動を過呼吸気味に乱した。

「現在、老熟偏執色情狂・萬田剛志と性快楽を喰らう女は、彼の流儀に添う萬田の身内女性に限られてるの？」

「彼に使う偏執という言葉の意味はそこにあるのよ。萬田一族の新たなコアの構築を目論む陰の女帝・萬田律子とリンクし、緻密に気脈を通じる麗しき雌達は近親の差はあるけど、例外なく身内女性よ。萬田剛志より四十四歳年下の後妻・萬田真実は、萬田剛志の実妹・萬田晃子の非嫡出子。三十九歳の小塚朱実は亡妻・萬田絹絵の妹。養女の首輪をつけられた美魔少女・萬田留美は、小塚朱実の異父妹・小塚香奈……旅行先の香港で消息を絶ち、その八年後に失踪宣告審判で死亡とみなされた女の非嫡出子。萬田律子は、萬田留美の秘された父親はDNA鑑定で検証しなくても、萬田剛志と推断してるわ。萬田留美は不遜なインセストの申し子になる……」

し子になる……」

「萬田律子の居城・萬田家豪邸は鬼畜が棲む伏魔殿ね。でも、奇妙に惹かれる。悦子が類い希な毒婦と呼ぶ陰の女帝・萬田律子に藍染美香として会ってみたい」

気持ちを妖しく揺らめかせた。

「嬉しい。美香を身内女にしたい彼女も悦ぶわ。密会の日時と場所は彼女の都合に合わすことになる。美香と奈魅のオーママ役の私は同行できないけど……」

「初対面なのに、独りで彼女と会うの？」

「初対面ではないでしょ。二週間余り前、美香はハニー・ジョブで、グレースな容姿で魅せる彼女と耽美なからみを愉しんだはずよ。美香には伽耶慎子という偽名を使い、万札三十枚のチップを……」

即座に、伽耶慎子との耽美な濡場を思い出し、

「嘘でしょ。魅せるノーブル・レディの容姿とは裏腹なニンフォマニアが、萬田律子だったの？」

と、問い返した。

悦子に魔妖な微笑と、意味深な頷きを返された。

「何故、萬田律子に、私のハニー・ジョブを洩らしたの？」

悦子を強くなじった。

「短絡的に、私が秘密を洩らした、と断定しないでっ。萬田家別邸のあの特別の寝室をステージにした萬田剛志と美香と私の三つ巴の性宴は、隠しカメラでモニターされていたのよ。収録された音声付きの映像をチェックした萬田律子は、哀

愁美で魅せる未亡人像とは裏腹

な美香のニンフォマニアぶりに強く惹かれ、彼女自身も美香と肌を合わせたくなったのね。父・萬田剛志が執心する藍染美香が安

全パイかどうかをプロに調べさ

せるのは当然の成り行き。美香のハニー・ジョブのこ

ことを知って、私に内密で、藍染美香の妖熟の女身、淫逸なセクシュアリティ

を入念に吟味したことになるわね。無論、遊びも兼ねていたと思う。萬田律子は印象に残った上客だった？」

「……………」

絶句して数呼吸間の沈黙を挟んだ。

記憶回路に刻まれた伽耶慎子こと萬田律子……悦子が類い希な毒婦と呼ぶ萬田家の陰の女君との濡場を呼び覚ました。

>

伽耶慎子こと萬田律子に指示された密会の場所は、一流シティ・ホテルのロイヤル・スイート。密会時間は午後九時から夜半過ぎまでの約三時間余。

指示された通り、美香は先にルーム・インした。

初対面の自称・伽耶慎子は、才女系キャリア・レディを想わせるたたずまいが冴えていたが、美香特有の勘で、極上のバイスکشユアリスト、と直感した。

『ノーブルな容姿とは裏腹な凄味のニンフォマニアだわ』

固有の勘が冴えた。現在、両性を喰らう三十歳代半ばの富豪未亡人……濡場でニンフォマニアの別貌を剥き出す妖婦に鼻眞にされているが、伽耶慎子の方がすべての面で格上だと読み取った。ファッションは一目でオートクチュールと分かる濃紺シルク・ウールのセミタイト・スーツ。スカート丈はシェイプリーなレング・ラインを魅せるニーハイ。オーナメントはプラチナでトータルされたシンプルなデザインのリング、ネックレス、リスト・ウォッチのみ。

バス・ルームで目敏く読み取ったボディ・プロフィールにはミリ単位のずれはあるが、身長一七一、B八五・W六〇・H八六。エロスが薫るスレンダーな女体に見惚れた。

艶張りのある絹肌は透明感のある真珠色。

凜とした彫りのノーブルな小貌。艶やかなダーク・ブラウンのミディアム・ヘアが小貌を際立たせている。実年齢より若い魅せる年齢は三十歳前後。

耽美なメイク・レズに費やされた時間は二時間余。

ノーブルなマスクからは想像もつかない凄艶な妖魔貌に魅入られ、神懸りのようなレズ・スキルに翻弄された。女が女を弄姦する愉悦を貪られながらエクスタシー潰けにされ、幾度もロゼな小さな死に追いやられた。イニシアティブをとられ、アクメの鞭でしばかれる甘美な性拷問、アクメにアクメを被せられる悦楽に惚けた。

>

呼び覚ました記憶を元の回路に戻した。

「上客との濡場では決してハニー・ジョブの矜持を忘れないのに、伽耶慎子こと 萬田律子は例外だった。濡場で頭わにした彼女の凄艶な妖魔貌に魅入られてネコに 化け、タチに妖変した彼女の神懸かりのようなレズ・スキルに翻弄されたわ。は したなかったけど、私の方から再度のミートをおねだりした。本音で……」

「ウッフッフ、凄味の妖魔の別貌を持つ萬田律子と、隠れ淫乱の美香の濡場が見えるようだわ。もう萬田律子は、美香にぞっこんよ」

「怖い。彼女とリンクして気脈を通じる女になると、セレブ彩に染まりたくない私が私でなくなってしまう……」

「でも、萬田律子の女になれば、サクセスを手にするようになるわ」

「私、小市民の女という流儀を変えたくないの。少しリッチな小市民の生活・スタイルを崩したくない。萬田律子とリンクしても、一定のスタンスを置きたい」

「表面上は見知らぬ他人というスタンス？」

「世間にはそういう類例が多いわ。一目で判別される萬田の身内女性にはなりたくない」

無意識の内に、萬田剛志、萬田律子とのパトロン&情婦を前提にした。

「美香は富裕階層特有の彩に染まらなくても、麗しき妖怪ともいえる陰の女君の側近女性になり、彼女に与えられたサクセス・ロードを歩むことになるわ。そのサクセスが幸か不幸かは、美香の主観によるけど……」

「私が選べる選択肢はないの？」

「美香にぞっこんの陰の女帝の深心は読めないわ。彼女の意識の中では、藍染美香はすでに彼女の身内女性よ。おそらく、美香に歩ませるサクセス・ロードも決めたはず。萬田家の覇権を握った陰の女君の意に逆らえば残忍な報復を受難することになり、美香だけではなく私もその報復の対象にされる。美香と私の秘した

個人情報まで握られたのだから、例え彼女の欲求が理不尽でも拒めない」

「宝物の魅希と奈魅も？」

「二人の愛しい分身は美香のアキレス腱よ。賢い分別をして……」

「強烈な脅しね」

「なるようになるしかない、と居直って、麗しき妖怪ともいえる彼女の庇護の傘の下に入ればいい。利己の本心を見破られないように恭順して、萬田の身内女というタグをつけるの。今までのライフ・スタイルを崩さずに、隠れたセレブ人種 になれるわ。萬田律子から得る蜜の資金で、美香が計画するヘア・サロンは予定 より早く具現する。リスクの大きいハニー・ジョブと決別して萬田律子&情婦の 関係を構築すれば、桁違いの蓄財が夢でなくなるわ。勿論、美香が売春シンジケートとの決別に要する資金も彼女が負担する。萬田剛志の婚外子……萬田律子の 異母弟になる男はある麻薬シンジケートを仕切る大物よ。無論、彼の戸籍は非萬 田籍。萬田律子は彼と異母姉弟相姦で繋がっている。当然、彼が持つ闇世界との

コネを使える。ビハインド・パワーを持つ彼は闇の重臣と繋がりがあるから、美香が売春組織と決別する件は相応の金で話がつき、後に尾を引かないわ」

体幹に糖蜜を染み込まれるように催囁された。

>

したたかなはんなり奸婦……先読みに長じた悦子の囁きに潜む自らの命運の変節を感じた。

『自らの流儀にこだわる私を弄ぶ運命の女神は悪戯好きだわ』

気持ちを少し性悪にし、

「萬田剛志と悦子の性愛関係はよく分かったけど、今一人の隠れパトロンだった日下恒夫とのその後は？」

と、突飛に問うた。

「エッ、突然、話しを飛ばさないでっ。彼は昨年二月、私と苛淫なコイタスの最中に誘発した心室細動で呆気なく他界したこと、寝物語で話さなかった？」

「聞いてない。悦子の勘違いよ。痴狼な交尾中にみまわれた突発の病死なら、俗にいう腹上死になるわね。事後の対応に手抜かりはなかったの？」

答えを促すように、桜桃をイメージさせる悦子の両乳首、お椀を伏せたような両乳房を淫忍にネッキングした。

「ウフフッ、彼の絶息に気付いた時点で、好色老人の余生は終わっていたわ。世間には類例が少なくない好色老人の腹上死……循環器系に疾患を持つ彼の交尾中過失致死罪を問われない冷静な対応ができた。一

一九番通報、電話で指示された応急の救命処置、所轄警察への通報に手抜かりはなかった。保護者責任遺棄の罪に問われるような下手打ちはしなかった。現場は彼との逢引用の高級マンションの寝室。緊急にコールした彼の妻との通話記録も残した。勿論、担当刑事立ち合いの現場検証、所轄警察での担当刑事に受けた事情聴取……被疑者に限りなく近い唯一の当事者としての執拗な取調に耐えた。過失致死の罪を認める自白はない。密室同然の現場の目撃者、現場の遺留品、その他の物証もゼロ。無論、彼との白日夢もどきの濡場をビデオ撮りするような危険も犯していない。罪を認めない私の供述調書では書類送検すらできない。死人に真相を問うことはできない。彼萬田剛志の違法薬物使用の件も一切関与していなかった、と白を切り通したわ」

「性根を据えて対応したのね。彼の破廉恥な死を富裕種族のスキャンダルに牙を剥く一部メディアに嗅ぎつけられなかった？」

「彼の妻が賢く対応して、夫の破廉恥な死の真相を自宅寝室で就眠中に見舞われた心室細動による死亡に偽装したわ。彼の破廉恥な死に様を知る私の口は、彼女からの口止め料で封じられた」

「悦子は、パトロン・日下恒夫の死で相当の利得があったのね？」

「その言葉を否定しないと、彼への殺意の有無に繋がるわね。殺人罪に時効はないけど、美香だから真相を吐く。私が好色老人の身体の変調に気付いた時、まだ彼は仮死状態だったの。彼の絶息を確認するまで、彼の死で得られる私自身の利得を考え、数分間、死の淵に沈む好色老人の貌を見据えながら、時雨茶臼の体位を崩さずに緩やかな腰動を続けた……」

「マアッ、怖ろしい。殺意があったことになる」

「予期したラッキーなアクシデントよ。内心で小躍りしたわ。日下恒夫の好色性もいまいちだし、老人の体力に合わせたセックスでは女盛りの性欲は充たされな

い。交尾の都度、魅せる淫ら狂いの演技がマンネリ化の傾向にあったわ。パトロンは富裕族の好色老人に限る

けど、私に執心する萬田剛志に比べると富裕のレベルはかなり格下だし、色情狂ぶりは中途半端だから未練はなかった。まやかしの情愛にうんざりして、彼とのパ

トロン&情婦の関係を清算したかったのが本音だった。事後の対応にミスがなければ、確信の殺人を完璧に隠蔽できる、と読み、彼の絶息を確認するまでの五分間余り、意図的に緊急通報をずらした……」

「搬送された病院での万が一の蘇生を想定して、通報に故意の時間差をつけてたのね。目撃者がいない密室だから、悦子の殺意を証す術はなかった。彼の死による悦子の利得は？」

宿命めいた執愛の絆で繋がる奸婦の不埒な本心を抉った。

「オッホホッ、怖い詰問……。美香には隠さない。体力は女盛りの私の方が圧倒的に強い。交尾の体位は私が上位の時雨茶臼。彼が急性心室細動にみまわれる直前の数分間、絶頂寸前の酸欠状態に陥った彼の口と鼻をピローで塞いだ奇怪な快感は忘れられない。クスリで強制勃起されたペ*スが絶息後も萎えなかったのが

不可思議だった。百数十秒間、私は屍姦してたことになる。利得は彼から預かっていた隠匿現ナマが二千七百万余。夫の死で富豪・日下家の女当主の座を得た日下未亡人からのスキャンダル口止め料として、日下恒夫との密会場所に使っていた「パトロンの不幸は情婦の幸せ、という図式ね。確信の姦り殺しなのに、罪悪感に苛まれなかった？」

高級マンションの所有権……」

「罪悪感など微塵もなかった。分身を持てなかった不生女の日下未亡人は亡夫よ

り二回りも若いから、私のおかげで厄介払いができたはず。生前の日下恒夫の話では、十数年も夫婦の営みを絶っていた日下夫婦は敬虔なクリ

スチャンで、日下夫人はあるボランティア団体の副代表の貌とは別物の妖婦の貌を秘す雌だわ。サ

ド性が強くて、忠奴もどきの住

み込みマルチ下家を性奴にして女盛りの性餓を癒やし、富裕族の複数のセフレとの情事を愉しみ、同衾しない夫には住み込みメイドに仕立てた若くてキュートな淫乱女をあてがっていた……」

ないようね」

「性秩序が乱れた今時のセレブ女性にも、淫蕩なバイセクシュアリストは少なく日下未亡人のセックス・ライフを想像し、『富豪家の家督を受け継いだ日下未亡人も、バケモノに進化する雌だわ。見知らぬ他人なのに、奇妙な親近感を覚える……』と呟き、軽い目眩を覚えた。

>

悦子との淫らな温度差はない。ビッグ・サイズのソファはディベッドにもなる。腰を前にずらして背中をクッションに沈め、膝を浅く曲げた両脚を半ばまで開いて性蜜にまみれた股間に悦子を誘い入れた。

「骨の髄までしゃぶり尽くしたいほど愛しい美香の女身は、強烈な催淫性ドラッグと同じよ。類い希な毒婦の萬田律子も、藍染美香という麻薬を手放せなくなったのだわ」

秘部に貌を近づけた悦子に囁かれ、「萬田律子との情交は一度だけよ。女性客とコール・ガールのからみだから、私は彼女が大富豪・萬田家に君臨する陰の女帝だとは全く知らなかったわ。彼女に

私の個人情報を知られていたな

んて、夢想だにできなかった。インセストで繋がる鬼畜父・萬田剛志のペ*スを喰らうノブルな鬼畜女と、本音もどきのメイク・レズを愉しんだことになる……」

「美香は両性を喰らう萬田律子に見込まれた麗しきバイセクシュアリストよ。自ら美香を吟味して、私と執愛関係が続ける隠れ淫婦だと分かった美香を身内女に

したい欲望を持つのは当然の成

り行きね。お願いだから、偏執色情狂老人と長年インセストで繋がった稀代の毒婦の情婦の一人になって、リスクの大きい蜜の生業から一刻も早く足を洗って欲しい。美香が得るハニー・マネーは桁違いに増えて、蓄財に加速がつくわ。萬田律子に与えられるサクセス・ロードを歩むかどうかは、美香の分別次第。上流社会に馴染めなければ、今まで通り、流儀にするライフ・スタイルを崩さない知恵を働かせればいい。彼女が仕切る複数の同族法人の非常勤重役の肩書きを与えられるのは确实。得る役員報酬も半端な額ではないわ。萬田律子の寵愛は、イコール、サクセスという構図をイメージして……」

わ。萬田律子の寵愛は、イコール

「でも、やがて寵愛もうつろう時がくる」

性情は冷酷で残忍だわ。彼女の

「摂理には逆らえないけど、萬田律子の側近女性の座はなくなる。彼女の身に不測のアクシデントがなければ、美香と私の身分は安泰よ。でも、陰の女君の庇護の傘下にいる限り、彼女との諍いは法度。彼女の意には絶対服従。類い希なはんなり毒婦への忠誠心は瞬時も曇らせないこと

が肝心。彼女の信頼を裏切れば

、残酷な報復、残忍な復習を受難する、と肝に銘じておくべき……」

悦子の忠告をからめた囁きに重圧され、息遣いを切迫気味に乱した。

突如、充血でより鋭敏になったクリトリスをチュツと吸い取られた。

「アッウン、感じる……」

特有の快淫感が背筋を突き抜けた。

>

淫血を滾らせた悦子のタフな淫魔ぶりは色情狂女と紙一重だ。

同性の性感メカニズムを知り抜いたラブ・スキルは匠級。特にクリニンス・スキルは並みの形容を寄せつけない。二十数分間、意のままに弄び廻られた。挿れられた右手二指の腹でスイート・スポットを廻られながら、性拷問と同義の緻密なクリニングスで小さな死に追いやられた。

悦子の腕の中でロゼな疑似失神から蘇った。

「萬田律子にプレゼントされたレズ専科のラブ・トイよ。挿入淫具に取り憑かれた匠職人がつくった逸品だわ」

パール・ホワイト色の男性器をソフトにデフォルメした双頭のスグレモノを見せられた。この類いのアイテムは女と女のコイタスをより快樂的にするが、悦子と挿れ合って愉しむ双頭のバイブより淫らな完成度が高く、滑らかな造形とパール・ホワイト色が綺麗だ。

「彼女も女性専科のアダルト・トイを愛用してるのね」

「女同士のコイタスを愉しむアイテムの一つよ。萬田剛志が秘蔵した数多くの江戸時代後期の春画とか、セックス・ノウハウ本の挿絵、挿入写真でも、女と女のコイタスの定番アイテムにされてるわ。レズ指向が強い萬田律子が性気楽を貪るでも不思議ではないでしょ」

「彼女と悦子の濡場でも挿れ合って愉しむの？」

「当たり前のことを聞かないでっ。このスグレモノの秘めたポテンシャルは、美香と私が愛用するスグレモノより格上よ。一度、この匠職人につくられたスグレモノの賢さと淫らさを知れば、

くなるほどの絶品といえる。賢くて淫らで、決して萎えない猛々しさとどんな体位でも愉しめるしなやかさ、挿れ応えのあるボリュームと、美味しい太さのグラ
ンで無段階で操作できる振動機能は秀逸だわ。アダルト・ショップとか通販で容易く入手できる普通の双頭バイブとは次元が異なるスグレモノよ」

美香は両手で愛撫するように吟味した。

「かたちと色が綺麗で優しくて、涎が出そうなボリュームね。お手頃サイズを少し上回った感じ。優しい真珠色だから目立たないけど、競り出たグランスのボリュームが凄い。生唾が出る……」

早く挿れたい淫卑な本音を隠さずに、片方のグランスの部位を味わうように舐め回した。絶妙の弾力がたまらない。口を大きく裂き広げて銜え込み、ディープ・スロートを試みた。ぎりぎり可能な太さだが、二分の一の部位までは銜え込めない。

『二分の一の長さは一八〇ミリ位かしら。生身の男性器とは違って挿れ方次第では、淫惨な折檻具にもなる』

内心で呟き、鮮明に記憶した老熟偏執色情狂・萬田剛志のクスリで強制勃起したシンボルと比べた。一回り太いが秘肌感触のシリコン製で絶妙の弾力性があり、

ためのアイテムの一つにしてい

モノの賢さと淫らさを知れば、

ンス、カード・タイプのリモコ

ンで容易く入手できる普通の双頭バイ

ほぼ自在にしなるから、苛淫な

性動を貪っても細かな擦傷とか炎症の危惧はなさ　　そうだ。

『このスグレモノの双方にマイクロ・モーターが内蔵されているのね。その淫らな機能を早く味わいたい……』

心裏で浅ましい本音を重ねた。

直ぐ園本音を悦子に見透かされ、リモコン操作で微震させられた。

「アワツアワツアワツ……」

意味不明のくぐもった喘ぎ声を洩らした。

>

ソファからチンチラ絨毯上に移り、フロントがはだけたバス・ローブを着けたままシックス・ナインでからみ合った。

十分間余り、淫靡な音を立てながら秘部を颯り貪り合った後、スグレモノを淫責具のように操る悦子に心魂までとろとろに溶かされた。

「狂ってしまう。もう堪忍して……」

反義語の哀訴を重ね、淫魔に化けた悦子を淫猛に燃えるタチに仕立てる嬉しい過ちを犯し、スグレモノの残る片方をずるずると呑み込まれた。ラーゲは古典枕絵本でいう体位に例えると、ひよどり越え。無論、美香はネコ。エロジナスに映えるヒップを浅ましく突き上げて悦応した。

真夜中の静寂に包まれたリビングの妖しい気配で、子供部屋のベッドで就眠中の魅希と奈魅が目覚めたら困る。卑猥なヨガリ声を嘯み殺し、チンチラ絨毯に両手の爪を立てて異様なエクスタシーに咽んだ。

二人の貪婪な性欲には底がない。豊富な性体験で練熟した二人の女身は驚くほど柔軟だから、よく知る枕絵本表四十八手の体位を苦もなくこなせる。悦子のポ応じ、振動機能を止めたスグレモノで繋がったまま時雨茶臼の体位をつくった。コードレスだから邪魔になるものがない。発達し差の部位を絞めつければ、自在に操れるスグレモノが抜け出る危惧はない。

「性鬼っ、淫魔っ……」

双眸に妖光を宿した悦子を甘く誹った。

「ウフフッ、嬉しいくせに反意語の睦言に聞こえるわ」

淫卑な本心を読まれた。

「濡場で淫乱女の本性を顕わにする美香のこと、骨まで食べてしいまいたいほど好きっ。本当に愛しい雌……」

「私も同じ言葉を返す……」

「偏執ニンフォマニアの別貌を持つ萬田律子は、嗜好に合う美香を寵愛する、と確信するわ」

「食傷されたら紙くずのようにほかされる……」

「読みが甘い。私と同じように美香の金脈になる稀代の毒婦から与えられる蜜の報酬は桁が違う。美香は萬田律子の長けた手練手管で必ず籠絡されて萬田の身内　　女のタトーを刻みつけられ、彼女への忠誠心を植え込まれる。

陰の女君が仕切る　　複数の同族法人の非常勤役員職を与えられ、相当額の役員報酬を得られる身になるわ。その上、彼女の父・萬田剛志の情婦役で得るハニー・マネーがプラスされる。

美香は毒婦を自認する萬田律子の強烈な磁場に引き寄せられ、彼女の直近女性の一人にされる。肌を合わす彼女と美香の情愛の絆は容認するけど、私と美香の執愛の絆を強靱な越えないことを固く約束してね」

「そんな杞憂は無用よ」

ミステリーな微笑を添え、

ジティブな動きに阿吽の呼吸で

た膻周囲筋で太いグランスの段

『悦子のこと、吸血したいほど好き。骨の髄まで愛してる……』

と、アイ・ランゲージで囁いた。

だが、美香自身、自らの面妖な深層心理は分からない。

『一寸先は闇……。個々の命運は誰にも分からない。予期せぬアクシデント、不可抗力の要因で悦子と切れるケースがないとは断言できないわ。私自身、したたかな奸婦だと自負している。悦子の存在が不測のアクシデントで過去形になってからも、ショックは一過性で終わって気丈に立ち直れる。愛のうつろい、陰りは避けられない摂理。やがて悦子との執愛関係は過去形になる。分身の魅希と奈魅との母子関係は別格だけど、永遠という保証はない……』

醒めた言葉を心裏で呟き、面妖な葛藤を覚えたが、気持ちを切り替え、

「もうこの淫らなスグレモノの虜にされたわ。私、上になりたい」

と囁き、ディープ・キスを交えながら体位を逆転させた。

「スグレモノに内蔵された電池はどのくらいも持つの？」

「使い方次第だけど、あと二時間余り。家電ショップで買える一円コイン大の水銀電池が高性能マイクロ・モーターの電源よ。スグレモノの真ん中の連結部をね

じって外し、両方の基底部にセットされた電池を取り替えるの」

「先刻、目と手でよく確かめたけど、真ん中に繋ぎ目などなかったわ」

「バスタブの湯中でも自在に使える逸品だから防水は完璧よ。秘肌感触のシリコン層の内には、弾力のある分厚い合成ゴム層があるようだよ。普通に見て触るだけでは、真ん中の精緻な繋ぎ目は分からない」

「文字通りのスグレモノね。マイクロ・モーター、ミニマム機器を内蔵したこの芸術品をつくったアーティストはどんな人だろう？」

「市民権を得られない私と美香の同性婚を知る萬田律子からプレゼントされた逸品よ。このスグレモノの制作した匠職人は女性だと聞いたわ。女と女のコイタスを熟知したバイセクシュアリストだと思う」

納得の意味深な微笑を返し、自負する名器で極旨のスグレモノのボリュームを実感するかのように腰を小さくラウンドさせた。

「アーン、太いグランスが素敵っ。スグレモノを悦子の伸縮自在の名器で締めて掴んで、優しく抜き差しして……」

「淫虐に姦られたいくせに、優しだなんて嘘つきっ」

四肢をからめ合ったまま、身体を反転された。

「先に美香をアクメに舞わせてやるっ。無節操なヨガリ声を嘯み殺さないで、妖しい気配で目覚めた子供がこのリビングに来たら、二人のコイタスを見られてしまうわ。愕然とした美香と私は、怖い膣痙攣を起こして離れられないかもしれないかもい……」

「悦子の性悪っ。脅かさないで……」

悦子の頸に両腕を巻きつけて頬擦りし、

『こんなスグレモノで繋がって鬨ぎ合う雌と雌のコイタスは格別の快樂だよ。ヘテロセクシュアルでは得られない性愉悦よ』

と、内心でにんまりと囁いた。

ほぼ一時間、女と女のコイタスに耽溺した。

愉しんだラーゲを枕絵本表四十八手の体位になぞらえると、時雨茶臼、茶臼のぼし、しがらみ、宝船、異形の松葉崩し、ひよどり越え。性魔に取り憑かれたかのように淫ら狂いした。

>

熟睡する二人の分身……魅希と奈魅のベッドの間に入って曲げた両膝をフロアにつけ、二人の分身の天使の値貌を生母の眼差しで愛撫した。悦子も美香の背後で折った膝で立ち、美香の背中にバストを押しつけて肩越しに魅希と奈魅の寝貌

を覗き込んだ。

「魅希と奈魅は私の宝物よ」

「分かってる。近親者でない私だって、魅希と奈魅は真の孫のように愛しい。美香の分身なのに、日常、私の分身のように錯誤する場面が少なくないわ」

「この三ヶ月余り、魅希と奈魅のことは、二人の祖母になりきった悦子に任せっきりね。魅希と奈魅も悦子のことを祖母……亡父の生母だと信じて母の私が嫉妬

を覚えるほど懐いてる。真実は

祖母ではなく、母である私の愛人。魅希と奈魅にとって悦子は非親族の女なのに、芸達者な悦子は祖母役だけではなく、私の領分の母役まで巧みにこなしてる。魅希と奈魅を人質に取られた感じがする……」

「人質だなんて不適切な言葉っ。棘を感じる。美香への私の愛を疑うの？」

睦言っばいトーンで切り返され、

『不用意な台詞で悦子の気持ちを逆撫でしてしまった……』

と、内心で狼狽えた。

悦子と入浴して真夜中の性宴の淫らな汗をすっかり洗い流し、性蜜にまみれたズに着替たのにすでに全身が淡く汗ばんでいる。

秘部を洗浄し、新しいバスロー

『就眠中の魅希と奈魅のそばで、悦子に淫姦されそう……』

予知は当たった。刹那の金縛りにあったかのように、背後から美香のバスロー

ブのサッシを解く悦子の両手の動

きを止められない。

「駄目っ。眠ってる子供のそばで淫らなことをしないで……」

魅希と奈魅のベッドの間に置かれたハーフ・サイズのロー・チェスト上のスタンドの灯りが、二人の分身の天使の寝貌をソフトに照らしている。

母性が疼き、

『諫めの睦言が反義語になり、悦子の青白い淫炎に注ぐ油になった……』

と、心裏で戸惑った。

分身の魅希と奈魅とは、人智で解き明かせない感通、精神感応、気脈で繋がっている。熟睡した二人の分身のそばで妖魔に化けた悦子の淫牙の餌食にされるのは体験だ。熟睡中でも、淫らな気配は精神感応で知覚される。だが金縛りにあったかのように身動きできず、悦子の淫辣な所作を拒めない。逆に、理性を嘲るように感応する自らの女身が恨めしい。

予知通り、悦子の右手の二本の指でヌルツとスリットを割られた。

『妖しく火照った女身が感応してしまう。呪わしい性業を背負う母……深層に性熟睡中の魅希と奈魅に許しを請い、悦子のペッティングに悦応するニンフオマニアの性情を顕わにした。』

獣が棲む母を許して……』

『悦子への灼けた執愛念をどうすることもできない。悦子も私への灼けた執愛念をどうすることもできないはず。性本能の淫蕩な疼き、淫血の滾りが呪わしい』

だが、直ぐ欲情した女身が居直った。脳裏に棲む別人格の淫蕩な雌に、性快楽貪る後ろめたさを打ち消されて妖変した。

『臆病な常人が唱える性道義を嘲けてやりたい』

心底で、捨て台詞に似た呟きを重ねた。

「悦子か私の寝室ならどんな淫ら狂いでもできるのに、眠ってる二人の子供のベッドそばで淫らに鬨るなんていけない。怪しい気配で目覚めた魅希と奈魅に、咄嗟の申し開きができない」

「美香と私はバスローブを着けたままよ。魅希と奈魅が目覚めても、バスローブで隠された耽美な濡れ絵は見られないし、咄嗟の申し開きは祖母の私がする。二人はまだ幼いし、母と祖母とのスキンシップには馴れていても、ネッキング、ペ

ッティングはまだ知らないわ。母と祖母の仲睦まじい接触は日常的に見馴れてるから驚かない、と思う……」

挿入された右手の人差指と中指の腹で捉えられたスイート・スポット、親指の腹で捉えられたクリトリスを甘く嬲られ、

「アウン、悦子の色魔……」

と、甘い喘ぎ声で罵った。

「ウフフツ、美香は強烈なアップ系の麻薬よ。私はその麻薬の真性アディクトだと分かってるでしょ。美香の発情、欲情の気配を感じたり、香しい性香、テレパシーのような性欲を知覚したら、条件反射のように淫血が瞬時で沸騰するわ。色魔が色魔を誹り、罵るなんて滑稽よ。美香と私を絶てない執愛の絆で繋いだ運命の女神が苦笑いするわ」

悦子のペッティングの密度がより濃くなった。

「アッアウン、感じる……」

「ごく普通のペッティングなのに、プ*シーはもう性蜜の坩堝になってるわ。魅希と奈魅が目覚めるから、卑猥なヨガリ声を洩らしたら駄目よ。柔らかな真珠がたまらなく美味しい。挿れた指が熔けそう……」

天使の寝貌で魅せる魅希と奈魅のそばだ。妖しい緊張で性感部位がより鋭敏になって感じ過ぎるほど感じてしまい、悦子の練達のフィンガー・スキルをやるせなく恨んだ。

「お願い、サラサラ味にして……」

「注文をつけるなんて、したたかな雌っ。愛しさが倍増するわ。バストもネッキングされたいようね」

左手でバスローブの裾を腰のあたりまでめくり上げられ、反射的にバスローブの乱れたフロントを両手で合わせて露出した下腹部を隠した。だが、背後からバ拒もうとはしない。美香と同じようにノン・インナーの悦子もバスローブのサッシを解いているから、ヒップに悦子の下腹部が密着した。

「ウウン、悦子のいけず。必ず、仕返ししてやる……」

「勇ましい睦言ね。本当に歯応えのある淫乱だわ」

急激にネッキングとペッティングの密度を濃くされ、オーガズム特有の微痙攣を走らせた。

『魅希と奈魅が目覚めてしまう……』

脳裏の何処かでスパークした青白い光を知覚した。

予知は外れなかった。魅希と奈魅が前後して目覚めたショックで意識が跳ね飛び、咄嗟に美香をフォローする悦子に救われた。

「ママとオーママは身体を寄せ合って、美香と奈魅の天使のような寝貌に見惚れてたのよ。起こして御免ね。また眠って……」

美香から素早く離れた悦子は魅希と奈魅の祖母のキャラを瞬時で冴えさせ、美香の背後に密着させた身体を離すと目覚めた魅希を優しい眼差しで包み込んで毛布の上から魅希の上半身を撫で、跳ね飛んだ意識を戻した美香は母性本能に動かされ、秒差のずれで目覚めた奈魅を優しい眼差しで包み込んで悦子と同じ所作で

魅希と奈魅が得た安堵は、即効性の睡眠導入剤のように作用する。直ぐ瞼を閉就いた。

バストに這わされる悦子の左手を

奈魅を愛しんだ。

じ、呆気ないほど早く眠りに

美香の寝室と同じ気密性の高い悦子の寝室に移った。

絶頂直前で魅希と奈魅が目覚め、そのショックで意識が跳ね飛び、悦子のネッキングとペッティングも中断されたから、アクメを得られなかった不満が燻っている。悦子も美香をアクメに舞わせて妖しい達成感を得られなかった不満が尾をひいている。

「魅希と奈魅が目覚めた時、私は動転して意識が跳ね飛んだけど、魅希と奈魅に感づかれたかもしれない。でも、眼差しに怪訝な色はなかったわ。美香と私の親密な接触を見馴れてるから驚かなかった。私の申し開きに安堵して、美香の瞬時の失神に気づかなかったみたい」

「よかった……」

美香の方からディープ・キスを仕掛け、ネッキングとペッティングを交えながら、一度、二度、三度と粘っこく重ねた。

「アクメの鞭でしばいてやる……」

淫忍に囁いた。

「嬉しい。寝室は密室よ。破廉恥に淫ら狂いしても、卑猥なヨガリ声は洩れないわ。眠った魅希と奈魅のそばで美香にいけないことをした私に淫惨な仕返しをして……」

悦子の女盛りを謳歌する美熟の女体に点在する性感部位をくまなく知り抜いている。双眼に蒼白な光を宿した悦子の心魂まで餌食にする優虐な淫牙を剥き、上半身に点在する性感部位を唇と舌と左手指で念密にネッキングしながら、右手の子の心魂を蕩かせた。

オーソドックスなレズ・スキルだが、灼けた執愛念が乗り移っている。悦子の無節操なヨガリ声は、ヘドニズムの美酒に相応しい肴になる。

まだアクメの鞭は振ふるいたくない。

意図的にブレイクを挟み、悦子の蜜壺に挿れた二本の指を抜き出さずに切迫して乱れた悦子の息遣いを整えさせた。

「美味しいオーガズム？」

「こんな素晴らしい愛し方をされるのは久しぶり。骨まで溶けそうなオーガズムがずっと続いている。もうもうメロメロ……」

「私の悦子への灼けた執愛念を感じた？」

「感じた。こんなにロゼな至福感に包まれるのは久しぶり……」

「悦子の淫靡な啜り泣き、素敵だった。きわどいアナル愛撫を織り交ぜてた時だった、と思う……」

「覚えてる。脳裏の一部が妙に冴えていて、美香にクリンクスされながらアナルのきわどい周りを愛撫されてる、と分かっていたわ。芯髄に糖蜜を染み込まれるようで、宙に舞うアクメとは異質のオーガズムに陶醉しながら啜り泣いたみたい……」

「悦子の魂を齧ってるようで後ろめたかったけど、面妖な背徳感に痺れ、愛しい女を淫責する快感にも痺れた……」

不埒な台詞を囁き返した。

悦子との耽美な鬩ぎ合いに惰性はない。濃密な中身は、流通するポルノ・ビデオのレズ・シーンがママゴトのよう思えるほど凄味だ。エンドレスに愉しめる情交だから短時間では終わらず、小休止を挟んで耽美な鬩ぎ合いが四時間前後続いても、執愛の絆で繋がった二人にとっては日常生活に組み込まれた性愛所作の内になる。異常ではない。週に一・二度、嗜虐のスパイスが効いたマニアックなからみに耽溺し、二人でヘドニズムの美酒に酔い痴れるが、生理日、体調を崩した日はセックスレスになる。

冷たいレモン・ウォーターで渴いた喉を潤し、妖光を宿したアイ・ランゲージで、仰臥した悦子に囁いた。

『愛し過ぎるから、淫虐にいたぶってやる……』

『好きなようにいたぶり、苛んで……』

膝を浅く曲げた脚を半ばまで開くボディ・ランゲージで煽られた。
「真夜中、熟睡した二人の分身……魅希と奈魅のベッドのそばで私を悦悶させた 邪淫な雌に相応しい淫虐な報復を望んでるでしょ」

悦子の本音を抉って魔妖な笑みを浮かべ、馴れた動きで悦子の脚間に腰を移した。もう回りくどい睦言はいらない。両掌を悦子のエロジナスに張った熟尻にあて、軽く押し上げた。淫酷な海老責ポーズを予知した悦子のヒップが九十センチ

余り浮き上がり、秘淫な股間が美香の眼前に晒し出た。

『悦子、気持ちをマゾ彩に染めて俎上の鯉になったみたい……』

蜜に濡れてより映えるエロジナス・スケープに見入り、面妖な感動を覚えた。

『女性器はエロチシズムの頂点だわ。創造の神がつ創った至高の芸術だと確信する……』

内心で独語を重ねると、バストを悦子のヒップに密着させて前に押し倒した。

執愛の雌の身体は怖いほど柔軟になる。極度の海老責ポーズを強い、悦子の貌上に悦子自身の秘部を晒した。

「ウーン、酷い美香が恨めしい……」

「嬉しくないの？」

「意地悪っ。分かり切ったことを聞かないで……」

「苦しくない？」

「平気よ。馴らされた卑猥ポーズだから……」

寝室のライティングはムーディな照度にコントロールされている。悦子はマゾ雌っぽいテンションを高めた。

「凄く淫らで、神々しいまでに綺麗な女性器に見惚れるわ。悦子も貌上の生々しい痴淫な情景に魅入られる？」
「気が変になりそう……」

「私の唇と舌と指で翳られ、弄ばれて透明な性蜜がしたたる様子を見せてやる」

突如のように、両手指で性蜜でずるついたスリットを無情に裂き、顎を抉り込ませた。彫りが凜とした悦子の子貌をサド雌っぽい眼差しで見詰めながら、抉り込ませた顎で小さな円を描いた。

「アグッアグッアグッ……」

俎上の鯉を甘んじる悦子特有の意味不明な淫喘が快い。充血でより鋭敏になったクリトリスをすぼめた唇で吸い取った。

「ウヒィー……」

両手指でシーツを掴んだ執愛の雌の淫らな奇声も快い。自らの滾った淫血の沸騰を意識し、淫責に駆られた。

蜜三昧（2）完

蜜三昧（3）に続く

